

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第113号（2015年10月）

風に吹かれて（91）

白井啓治

『立ち待ちの月（十七夜）』

常よりも大きく 蟋蟀の声

9月28日の満月（十六夜（いざよい）の月）は、数十年ぶりのスーパームーンといわれ、各地に常よりは1.5倍ほど大きく見えるお月様が現われた。

小生もいざ宵の始まりを待かねて東の空を見に庭に出てみた。地平に沈んだ夕陽のこぼれ光を受けて金赤に輝く満月が昇って来た。天上にある月を見るのも良いが宵の始まりの月をしみじみと眺めるのも良いものである。これは隠居爺さんに与えられた特権であろうか。

8月の末に長年一緒に暮らしてきたお猫の耳ちやんが亡くなり、夜にそろそろ布団を敷けと言ってくる者が居なく、寂しく思っていたが、9月の19日新しく保護した真つ白のお猫を家族に迎えた。一歳半程度の雌猫であるが、お犬様との生活にもすぐに慣れ、些か賑やかになって三人での陽だまりでの寝つたりを楽しんでいる。

家族を迎える気持ちになったのは、お犬様が気落ちして沈み込んでいたからであった。不思議なもので、新しいお猫（暁と命名）が家族となるや、

元気が復活。若いお猫の元気に閉口しながらも活き活きとしてきた。矢張り家族は賑やかがいいようである。

多くの憲法学者から憲法違反だと判断されながら、無能な政治家たちによって安保法制が国会を通ってしまった。憲法9条の改訂を訴える憲法学者にまで、違憲解釈と指摘されながらの国会通過であつてみれば、無能な政治家を嘆く以前に我々選挙民の考えることを捨てたお任せ主義を嘆かねばならないだろう。

我が国の首相もそろそろ国民の直接選挙にする時期が来ているのではないだろうか。そうしないと選挙民の自責感覚が育つてこないのではないかとと思うが。現に、いまだに自分はある人、あの政党に投票していいことを免罪符に思う感覚から抜け出せないでいる人の実に多いことか。

次の国政選挙は18歳からの投票となる。いつそのこと選挙区割り止め、議員定数を大幅に削減して全国区のみにしてはどうかと思う。地方の自治は地方に任せ、家元制度のような利権構造を先ずはやめることが必要であろう。

9月号に、書庫の故太田尚一氏が昨年当会報に投稿下さった「総社宮祭礼と市民の矜持」と題

した原稿を再度掲載させて頂いたところ、昨年は編集室に直接の反応はなかったのですが、今年は思わぬところで石岡市民の方から、石岡のお祭りの歴史について、今まで思い込んでいたのと随分違うのですね、というお話を頂いた。

石岡といえば祭りだっぺ、と言う人からの反応だったので大変うれしく思った。焼け石に水だと思っても、一人声を出しても聴く者は居ないと思つても、声を出して確り言うことがいかに大事であるか改めて考えさせられた。昨年の掲載時にも編集室には届かなかったが、確実に太田氏の思いをくんでくれた人がいただろうと思う。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

『神』とは何か(1)

菅原茂美

まず広辞苑によると「神」とは

①人間を超越した威力を持つ隠れた存在

人知をもつて、はかることのできない能力を持ち、人類に禍福を降すと考えられる威霊

②日本の神話に登場する人格神

③最高の支配者

④神社などに奉祀される霊

とある。神様は祈願者を助けるためだけではなく、人の道に反する者に対しては、戒めや制裁も、神様の職務範囲らしい。

*

そもそも人類は「神」というものを、いつ、どのようにして認識し始めたか？

「苦しい時の神頼み」などは、善良な庶民の切なる願いとして、商売繁盛・学業成就祈願など、よくみられる習慣。神社では各種お守りや、縁起物など販売している。プロ野球では「神様・仏様・稲尾様」などと言われた。

しかし歌の文句にもある『♪茶断ち 塩断ち お百度参り』ときては、わが身の命にも代え、愛する大切な人を助けたい…とする正に切羽詰まった強烈な祈願である。また昔は、航海の途中、海が荒れた時、誰かが犠牲となって海に飛び込み、海神の怒りを鎮めた等の物語もある。神に生贄を捧げるとか、「人柱」など、残酷な話である。国王等は、国(自分)の安寧のため、庶民を「生贄」にして、わが態勢の安全を図ったりした例もある。

【私がマヤ遺跡を訪ねた折、真に驚いた話。

マヤの信仰では、太陽は昼間地上を照らし、民に恵を与え、夕には西の果てに沈む。夜は西から東に向かって地中を掘り進み、翌朝再び東の空に昇り、我らに恵を与え賜う。夜、地中を掘り進む労苦に対し、生贄の血を捧げ、人は感謝の誠を捧げなければならぬ。生贄は捕虜など、断頭台に乗せられ、切られた首を丸い石の台に乗せ、流れ落ちた血液が地中にしみ込み、太陽の神は、それを吸い元氣を取り戻し、また地中を掘り進むという。これらの儀式を行った遺跡が現存する。】

*

さて、「戦勝祈願」などは、真に生臭い話。人を殺しに行く者が、無事願いが適い我が方だけが生き延びられれば良い…とする、エゴ丸出しの願望である。それが平和な今日でも選挙やスポーツ、更には受験戦争でも通常行われている。ジャイアンツも鹿島アントラーズも毎年戦勝祈願を行っている。最も対抗チームも同じ事をやっているのだから、所詮は、五分五分の話。神頼みとエゴは、表裏一体の感がある。

一人を殺せば犯罪だが、敵を大量殺戮すれば、英雄となり、「軍神」として祀られる。

歴史書は大方、勝てば官軍負ければ族軍で、勝った方が正義で、負けた方は邪悪なもの、世を乱す悪者として成敗した…などと書かれている。常に勝利者が己を正当化し、敗者を罵る傾向が強い。私に言わせれば、負けた方の者が、切歯扼腕、涙ながらに書いた古文書が後年、土蔵の奥から出てきた話などが、虚飾の勝者と違い、歴史の真実を伝えるものではないかと思う。弱肉強食は獣どこ

るか、人類史において明々白々である。

こうしてみると、人の心はかなり身勝手なもので、少しは努力をしてみるが、大願成就は「神頼み」に帰する感もある。頼まれた神様も、どこまで聞いてやったらよいものやら、迷うだろう。

さて余分な事ではあるが「八幡様」と言われる神社があまりにも多いので、ネットで調べてみたら、北海道から沖縄まで全国に463社も存在する。そもそもは福岡県飯塚市にある「大分八幡宮」が起源とされ、そこから子社↓孫社↓……へと、分社され、末広がりが増えていった。地元福岡県に八幡様は49社、次いで東京に38社、そして、茨城県には9社存在する。1083年、後三年の役の源義家は、京都岩清水八幡宮で元服したため、八幡太郎と言われた。義家は鎌倉幕府の源頼朝、足利幕府の足利尊氏などの祖先に当たる事から、後世に英雄視された。

*

私自身はかなり無神論者に近いと思うが、人並みに初詣は欠かさないし、神社仏閣を訪ねた時は、ささやかでも賽銭をあげ、家内安全・孫の学業成就祈願など、深々と首を垂れる習慣がある。

昨夏、私は膵臓癌の手術を受ける時、数%の不成功率の話もあるので、家族が改めてセツトし、神社に参拝した後、大手術を受けた。幸い超早期発見のため、胃底幽門部、十二指腸、胆嚢、膵頭部など摘出手術で完治。術後3か月で仕事に復帰。更に現在、多趣味に全力で体当たりしている。

神仏に頼るのは、人は己の弱い心を奮い立たせるために、神仏に対し「精一杯頑張りますから、

脇から助けて下さい」という願いごとを、儀式化して、色々な宗教行事など行うのである。

【私が現役時代、あるイスラム教国の獣医師を、国際協力事業として、一年間、国から頼まれ、家畜伝染病診断学の技術指導した事があった。その際、彼が私に言った言葉が忘れられない。

『日本には神社仏閣は沢山あるようだが、国民の宗教心はそれほど厚いようには見えない。強い宗教で拘束せずに、国家が一つに纏められるのが、不思議でならない』

言われてみれば確かにそのとおり。イスラム一神教の団結は非常に強い。

世界の多くの国は、何か強い宗教で国民がしっかりと纏められ、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教など、ゆるぎない団結で確固たる国家を形成している。勿論異端者などは、まずその国で生存は困難であろう。確かに日本では多くの宗教行事は行われるが、国民の信心深さは？…。】

*

さて本論。そもそも人類に「神」の概念が、いかにして発生したか、その経緯を考察してみたい。

私が思うに、人類の長い歴史を遡ってみると、原人時代に、少数の行動グループが遊走生活中、台風・地震・山火事・火山噴火などの天変地異に遭遇すると、恐怖に慄き、肩寄せ合って一歩も動けなくなつたに違いない。

そのような時、知能発展途上の我々の祖先は、なんととはなしに、自分達の行いに、なにか過ちがあり、天とか大地の超自然的な『何か』が、自分達の行いを怒っていると感じたに相違ない。

すると群れの中の長老などが、『この間のあの行動は、まずかつたな。今後、二度とあんな事はしないと、約束をし、怒りを鎮めてもらうよう、みんなでお祈りをしようではないか』…と、自然発生的に、抗いがたい『神』のようなものを、みんなが心の中に感じ取り、強く認識するようになったと思われる。最初漠然としたものが、山には山の、海には海のそれぞれ、侵し難い神聖な領域があり、それを崇（あが）め奉ることににより、安全祈願をするようになったものと思われる。

【聖書には、神が、泥からアダム（男）を創り、アダムの肋骨から、イヴ（女）を創って、人類が誕生した事になっている。しかし科学的には、神が人を創つたのではなく、逆に人間が、『神の概念』を創りあげたと言える。キリスト教原理主義者の中には今日でも、地動説や進化論は、単なる一説にすぎなく、聖書に書いてある事のみがすべてであると信じている。それゆえ現在、米国では学校で進化論を教えた教師は、神を冒瀆した者として襲撃されたりしている。】

このようにして、原始的な宗教が芽生え、誓いを述べ・反省をし、願ひ事をする対象として『神』をはつきり認識し、人々は心の拠り所として絶対的なものの存在を権威づけるために、鎮座まします『社（やしろ）』を建立し、信仰の対象として、発展していったものと考えられる。

そして原始宗教は、過酷な自然環境の中で、なんとか一族が、食糧・病氣・天敵など問題なく、一日一日が無事に過ごせるようにとの祈りから、自然に発展していったものと思われる。そして、ついに『神の概念』をはつきりと認識し、信仰の中心とし、神は究極の実在となり、礼拝や祈りの

対象へと進化していったのである。

また、古代の人々は、家族単位か、あるいは、いくつかの家族が寄り集まった小規模のグループで行動していたと考えられる。するとある時、その中の経験豊かな知恵あるものが年老いて、帰らぬ人となった。今までその長老の指図で、幾多の困難を乗り越えてきたのに、一群は途方にくれる。

『何とか生き返って、再び我々を導いてほしい。』知恵を授けたまえ！ 勇気を授けたまえ！と長老が眠るお墓に、跪（ひざまづ）いたに相違ない。そしていつの日か再び蘇り、魂が戻る肉体をミイラにして保存し、エジプトなどではピラミッドに厳重安置したと思われる。このようにして、信仰の原点は、祖先霊を祀ることから始まったと考えられる。そして戦（いくさ）の好きな民族においては「軍神」が守り本尊であり、更には庶民のささやかな願いとして、ここの神様は、目の病を治してくれるとか、お産を軽くすましてくれるとか、色々に変化していったものと思われる。

人類は原人時代にすでに遺体を埋葬（*1）する習慣が芽生え、新人（*2）になってからは、副葬品の種類や数も増し、お墓も時代とともに拡大していった。石岡には巨大な前方後円墳（*3）がある。後の世では、特に智恵の有った者、軍功の有った者は、特別の社に祀られる事となった。

【*1・35万年前の原人が、人を埋葬した跡が発掘されている。*2・新人は今から20万年前、ホモ・エレクトス原人から分派した我々ホモ・サピエンスを言う。*3・舟塚山古墳・国史跡。石岡市北根本に存在する。全長186m、5世紀後半に建造】

＊

さてそれでは、物事を認識する「心」は、一体どこにあるのか？「心」の座は、6000年前のエジプトでは、心臓にあると考えられていた。同じく4000年前のバビロニアでは肝臓にあるとした。しかしギリシャ時代（BC400年頃）、医学の祖と言われたヒポクラテスは、心は「脳のいとなみ」と考えた。

そして近世哲学の祖、17世紀のデカルトは、精神と物質の「二元論」哲学体系を樹立。『我思う、故に我あり』の『我』つまり、心や意志の源を、脳の中の「松果体」に有りとし、脳室に魂が宿るとした。今日では、松果体は脳の基底にあり、メラトニン（睡眠促進ホルモン）という物質を分泌し、概日リズムを造り出している事が分かっている。以降、心は、脳と深い関係にあるという事は、誰でも認めるところである。「一元論」は、心は脳の活動の結果であるとし、「二元論」は心と脳は全く別のものとして、心は脳から独立していると考えている。しばらく両者は対立を続けていたが、二元論は、キリスト教など宗教と親和性が強く、優勢であった。

しかし、現代では脳科学の進歩により、心脳一元論の考えが優勢になった。心が一個一個の神経細胞の活動に還元できないが、システム全体としてニューロン群の一連の特殊な活動によるプロセスとして「心」が生まれるという「創発的一元論」に落ち着いている。しかし、熱いやカンに手をひっこめる「反射」や、睡眠中の「夢」は、間違はなく脳の活動の結果であるが、それを「心」とは言わない。脳の活動は、即「心」ではない。

脳の一部を電気刺激で活動させると、その部位に対応した特別の「意識」が生じてくる。ただしその刺激が弱くて、脳活動が弱いと、意識は出てこない。つまり、ある程度以上の纏まった脳活動がないと、「意識」は生まれない。従って霊魂等が脳を刺激して「自由意志」が生まれるのではなく、純粹に物理的な電氣的刺激により、脳が活動して「意志」が生まれるのである。

脳の中でも、心の働きに最も密接に関係するのは「大脳新皮質」である。これは哺乳類、中でも「霊長類」で特に発達している。特にヒトでは脳の90%は「大脳新皮質」である。この「領域」が、知覚や認識、記憶、言語、創造などを司る。これらの領域は、サルで70個、ヒトで100個以上存在し、例えば「側頭連合野」という領域は、形を知覚・認識する機能として働き、「前頭連合野」は「思考」の機能単位である。その証拠は、脳の特定部位を破壊すると、それに対応した機能が働かなくなる。

大脳の大方を占め、新皮質が理性を司り、人類は大変高等な動物に進化したかに見えるが、どこいそうは問屋が卸さない。大脳の基底部にあり、旧来の野生の基本を支配している「旧脳」が、時々強烈に威張り出し、「本能」を発揮し、新参者の活動を抑え人間を獣に戻す。食欲・性欲・闘争本能などが、むき出しの活動をする。本能と、理性を司る新皮質が、バランスよく働けば、市井の善良な庶民と言えるが、巷には、強欲の塊みだが、建前上、猫の皮をかぶった紳士が、貪欲に幅を利かす。

大脳新皮質が急激に発展したのは、高々40万年前からである。決して時間と正比例で大脳容積が

増えていったものではない。人類の祖先が、大型類人猿と枝分れし、直立二足歩行を始めた700万年前は、大脳容積は450cc足らずであった。それから520万かけて我ら新人の親である「ホモ・エレクトス」原人が生まれた時の大脳容積は900ccである。そして今からおおよそ40万年前、ホモ・エレクトスは意図（*4）して「火」を用いるようになり、植物や肉に火を通して食べるようになると、大脳容積は急速に拡大していった。偉大なるバージョンアップである。最初は520万かけて450cc増えるペースだったのに、最後はわずか40万年で、550cc増えたのである。正に驚異的な大脳容積の肥大である。確たる証拠があるわけではないが、この急速な大脳肥大が、現在人類が抱えている諸々の不具合（戦争や略奪）の源になっているような気がしてならない。

【*4・200万年前の炭化した獣骨は発見されているが、これは自然火災による物と思われ、その頃、人類が火を起していたという証拠は見つかっていない。】

しかし余談だが、大脳の大小で「知能」が決まるわけではない。現代人の大脳容量は1450cc。1800ccの知的障害者もいたし、1921年度ノーベル文学賞のアナトール・フランスの大脳は1000cc（原人並み）であったという。意図した火の使用↓栄養改善↓大脳容積拡大の一連の変化が、更に手や道具などを使う事により益々大脳は発達し、事もあろうに、欲望の拡大へとつながった。腕力・謀略でその目的を果たし、ついには好戦的な、凶暴な人類へと進んでいった。アウシュビッツの大量虐殺はその典型的な例と言えよう。私はこのように、凶暴性に進化した人類の大脳を

「毒饅頭」と名づけている。人類は、毒饅頭を脳天に頂いた「怪獣」である。

脳の暴走をどうやって止めるか？…進化は逆戻りしない。無策でこのまま暴走を続けたら、必ず取り返しのつかない破滅が待っている。老人の単なる杞憂ではない。温暖化や資源枯渇などを防げないのならば、こんな動物に地球のリーダーは任せられない…と神様が怒り、破滅の鉄槌を下されるに相違ない。人類に、もし智慧というものがあるのなら、早々にこの「怪獣（毒饅頭）」を飼い馴らす工作需要である。

（続く）

地域に眠る埋もれた歴史（7） 木村進

真壁地区（1）

石岡から峠を一つ越えたところに真壁の街があります。少し前までは茨城県真壁郡真壁町でしたが、合併で桜川市真壁町と名称は変わりました。ここは3月のひな祭りと石の産地として知られ、江戸時代の建物なども残っており興味深い地域です。

しかし、なかなかこの地に足を踏み入れるのがためらわれていました。理由は、単に峠を越えてくるのが面倒だからというところもありますが、歴史的にも単純でなく書き出すと調べるのが多くなつてなかなかまとまらないのです。歴史オタクでもないつもりだが、ここを知るには平将門、平良兼（国香の弟）、菅原道真、真壁氏、赤穂浪士の浅野家などを思い浮かべる。

この一つ一つの記事から結果的に何かが見えてくればそれで良いと思う。

○真壁氏累代の墓

まずは、町の名前と同じ真壁氏の累代のお墓にお参りしていきましょう。

石岡からは県道7号線を柿岡から上曽峠を越えて真壁の街に下る坂の途中にあります。

古代の真壁と石岡を結ぶ街道はこの上曽峠より一つ筑波山よりの湯袋峠を通る道が使われていたようです。そちらの湯袋峠道は常陸府中と小栗を結ぶ道であったため最近「小栗街道」などとも呼ばれています。

しかし今回は、少し新しい上曽峠の道沿いからスタートします。

この場所は少し高い場所にあり、街が見下ろすことができる良い場所です。真壁氏の墓のあるのは「遍照院正得寺」という寺の裏の墓所です。寺の境内に隣接した木々で覆われた場所がこの真壁氏のお墓群です。

この五輪塔は全部で40基ほどあるそうです。これだけあるとやはり圧巻です。

真壁氏は石岡の大掾（だいじょう）氏と兄弟分です。大掾氏もつくば市北条の多気（たけ）城にいた多気大掾直幹の四男長幹が真壁に築城して真壁氏を名乗ったのが始まりとされています。この多気直幹の長男が多気太郎こと多気義幹（たけのよしもと）で、八田氏らの換言で源頼朝によって、建久4年（1193年）失脚させられ、所領も大掾職も没収された人物です。大掾職はその後、この多気氏の系列であった水

戸の吉田氏（馬場氏）に引き継がれ、石岡の大掾氏として継続します。

この五輪塔も東日本大震災の地震でかなり大きな被害にあいました。これを「真壁石燈籠伝統工芸士会」という石の町真壁の石組合が修復したようです。この真壁氏は鎌倉幕府の始まる少し前の室町時代から戦国時代末期まで約400年間栄えました。しかし戦国時代末期は佐竹氏についています。

この五輪塔から真壁の街が見下ろせます。

○五所駒滝神社

真壁氏累代の墓（40基の五輪塔群）の北側に五所駒滝神社があります。ここに来るまでこんな立派な神社があることを知りませんでした。

神社の地図を見ると県道7号線から神社に入る道があつて、真壁の伝承館などで地図をもらった人達は、こちらから訪れるのかもしれませんが、真壁氏の五輪塔に行った時に、その裏の空き地の向こうにこの神社が見えました。

そして、この寺の方から上る参道があり、この参道から神社にお参りに行きました。昔はこちらから神社にお参りしたのだと思います。途中小さな川が参道沿いに流れています。

一の鳥居をくぐります。周りを木々が覆っていて静かなひんやりした雰囲気です。

「千年の森」と書かれた看板が置かれていました。創建（1014年頃）されてから1000年が経つというので「千年の森の会」という組織ができて活動されているようです。

この神社は、武甕槌大神（たけみかづち）大山咋神（おおやまくひ）猿田彦神（さるたひこ）木花開耶姫（このはなさくやひめ）菅原道真公（すがわらみちざね）を祀っています。

奥に二の鳥居が見えてきました。この川沿いの道が昔の山道のメインだったと考えて良いでしょう。神社の名前に滝がつくのですからこの川の滝が近くにあった場所なのではないかと思われます。

この神社にはもう一つ三の鳥居があります。その奥に神社の拝殿が見えます。

神社拝殿の手前に川が横切っており神社の脇に清流が流れます。

この三の鳥居をくぐったところに「むぐれ石」が置かれていました。

そして「百度石」と書かれたそろばん玉のような石の輪が10個ほどあります。数を数えるためののでしょう。

拝殿には川を渡って行きますが、橋には「長寿橋」と名が付けられていました。

川はこの上流の上曽峠の方から流れてくるのですが、少し上流に「分水嶺」の碑が建っていました。川をはさんで神社の休憩所のような建物が有り、緑の中で観光地に來たような感覚がします。

千年の森は森林浴の森でもあります。

五所神社とか、六所神社、十二所神社などはいずれも多くの神社をまとめて「つ」にしたためについた名前だと思っています。昔の国府の多くのところには「総社」が置かれた。

さて、この五所駒滝（ごしょこまがたき）神社は平安時代の長和3年（1013）の創建といわれ、

当時この山に小さな祠が置かれていたといえます。

それが、常陸平大掾であった多氣直幹の4男の平長幹がこの真壁に城を築いて真壁氏となり、承安年間（1171～1174）に鹿島神宮から武甕槌命の分霊を祀り、真壁氏の氏神としてまつたという。五所駒滝神社という名前になったのがいつなのか。真壁氏の時代になってから「駒瀧神社」と呼ばれていたらしい。明治6年に駒瀧大明神（駒瀧神社）に村内の4社を合祀したというので、名前はこの時から頭に「五所」を付けるようになったのかもしれない。

この神社の祭神を見ると、武甕槌大神（たけみかづち）大山咋神（おおやまくひ）猿田彦神（さるたひこ）木花開耶姫（このはなさくやひめ）菅原道真公（すがわらみちざね）と五神です。

7月に行われる「真壁の祇園祭」がこの神社のお祭りで400年の歴史があるという。

400年の歴史の真偽はともかくとして、なぜこの神社が祇園祭なのかという疑問がわく。これも石岡の総社の祭りといわれる「石岡のおまつり」と状況は似ているようだ。

石岡のおまつりも形の上では「祇園祭Ⅱ天王祭」だと思ふ。江戸時代までは石岡市内の中心である中町に「天王社」があり、牛頭天王を祭っていて、そこで行われてきた祇園祭（天王祭）が形を変えたものだろう。

明治になった時にこの日本全国にあったインドの仏教の牛頭天王を祀る天王社は「寺」ということで存続ができずに多くが同じ祇園祭を行っていた京都八坂神社の祭神「素戔鳴尊（す

さのお）」を祀るようになった。しかしここには祀られていない。

神社の本殿の彫刻も立派です。本殿は入母屋造銅板葺、三間社流波風造で、宝永元年（1704）古城村の土工増淵清兵衛により再建されたものだそうです。（市有形文化財）

神社の拝殿横には地元の酒「花の井」の酒樽が奉納されていました。この神社でもひな祭り時には花人形が飾られるようです。

緑が多くマイナスイオンがいっぱいでした。

○ 真壁城址

中世の真壁氏の城跡が広大な敷地（約12.5ha）として残っています。

これだけ広大な敷地がそのまま残されているのは全国的にも珍しいのではないかと思う。

平成6年に国指定史跡に登録されたそうだが、この中心であった古城の場所には立派な体育館が建っているが、残りはほとんど手つかずのままです。現在の公園としての整備が進められている。この体育館のある台地に稲荷神社が建てられています。

体育館わきの石碑の隣にある木柱には「神道霞流剣術発祥の聖地」と書かれています。

この剣術は調べてみると、「真壁城の第十八代城主真壁久幹によつて創始され、その家臣の桜井大隅守吉勝が夢想権之助勝吉に伝授し、現在では神道夢想流杖道の併伝武術の一つとして伝えられている。」と説明がありました。

そしてその脇を少し下りると、堀跡らしき低地とその外側に広大な土塁跡が見られます。

この土塁でぐるりと囲われていますが、後から

復元したものが多くいます。

ここは台地にはなっていますが、山城ではありません。東側一体は筑波山から加波山に続く山並みが続いており、城も後ろに山を背負って建てられたようです。

土塁は二重に張り巡らされていたようで、堀跡などもよくわかります。このようにないも手をつけられずに残るものだろうか？・・・どうやら土塁は復元されたものようです。

この城は承安2年(1191)に常陸大掾であった多氣直幹(なおもと)(つくば市北条の多氣山に居城)の四男の長幹(ながもと)がこの場所に築城して、真壁氏を名乗ったのに始まるとされます。

こここの真壁氏は上杉禅秀の乱(1416年)に鎌倉公方(足利持氏)に当初は味方していたが、途中から小栗満重に味方し、足利持氏派の宍戸満里により滅ぼされてしまいました。

この後真壁氏も復権が許されたが、戦国時代には(石岡)片野城の太田三楽斎(佐竹氏の客将)とともに小田氏を手這坂で破ることにあります。そして、石岡市柿岡の「柿岡城」に真壁房幹が入り、家督をそちらに譲ったため、こちらは柿岡の支城のようになりました。

しかし、戦国時代が終わると佐竹氏が秋田に移ったため、ここにいた真壁氏も家臣を連れ、秋田の角館に移りました。(1602年)

秋田角館は芦名氏が江戸崎から移り町並みを整えましたが、こここの真壁氏もこの武家屋敷に住んだことになりません。

この後徳川時代になってからこの真壁は尾張の浅野長政が家督を子供に譲って、隠居の地と

してここ真壁藩5万石をもらって入ることになりました。これが笠間に移り、その後赤穂に移って赤穂浪士の事件となります。

しかし、笠間に移ったあと、笠間藩の陣屋がここにもできますが、この場所はこの城の場所ではなく、今も江戸の屋敷並木が残る真壁の伝承館のあるあたりになるようです。(続く)

空白

伊東弓子

中学校の運動会を見ている私。中学生も客席にいる人も、遠く離れて見ている私も同じ空間の中にいる筈なのに、私だけが浮いている様な、別世界に存在しているかのような気持ちでここにいる。何故こんな気持ちで離れた所にいるのだろう。この夏の長く辛かった日々、身を置くところも心を休めるところもなかった哀れな自分を思い出す。

今迄、あの子は自分の傍にいる子だと思いきっていた。離れていても頭にあり心も繋がっていた筈だったが、これは独り善がりだったのだろうか。「わーッ」という歓声があがった。皆と一緒に喜びの声を出していることだろう。

六年前の夏は、あの子が一人で海を渡って来るというので、確りした孫だという自負があった。

迎える為の一日一日が喜びだった。朝顔の種を蒔いてその成長していく姿の楽しみと、待つ楽しみを重ねていた。青い花を毎朝あの子と数え、ラジオ体操も元気にやった朝が続いた夏だった。その種は次の年も蒔いて思い出に耽けた。そして毎年続いた。あの年のあの朝顔はあの子への思いに繋がっている。

又、「わーッ」という歓声があがった。皆と一緒に笑い、話していることだろう。

今年のように淋しい夏はなかった。食事もの儘残っている。自棄喰いという言葉があるが、私はそれらをお腹に押し込んでいった。台所に来るのも水を取りに来る時だけだった。「ガシヤ、ガシヤ」と冷たい音がする。

又、「わーッ」という歓声があがった。きっと、皆と一緒に係の仕事や準備の作業もしていることだろう。

トマトも梨も栗にも手を出さなかった。紫陽花、どくだみ、秋桜にも目をおかない。ごきぶり、なめくじ、蠅にも悲鳴もあげず、淡々とした表情だった。玉虫の美しい羽にも、ひぐらしの透き通る羽根にも興味はなかった。あんなに好きだった虫類の存在をも無視しているかのような。

照り続く道を、雨の登り坂を黙々と部活動に出かけて行った。自分の道を行く、目標に向かって行くのだろうか。その道は一緒に行けないのだとつくづく思う。自転車で行くあの子の横顔に、あの頃の表情がある。私は私が暗くならないように、努力しなくちゃと思いたったのだ。

「青团！ソレッツ！ソレッツ！」の応援団の音が響きわたる。同じ体操着だからよくわからないが走っている中にあるのだろう。

言葉の遣り取りがなくなっていた。「おはよう」が「お：」の音に変わり、とうとう音も聞えなくなかった。私からは当り前に声をかけ、あの子からの言葉は求めないと心に決めても話したかった。会話のない空しさは辛かった。家にいるのは、金魚と瓶、そして犬のいづみだ。特にいづみにはこ

飯時、散歩時、私のうつぶんを聞かせた。分かっているのかどうか涼しげな眼差しで話を聞いている。夫の表情に似ているのも可笑しくなる。ペットを可愛がる老人の気持ちを分らないでもないこの時は思った。

「黄団！フレー！フレー！」の応援団の声が鳴りわたる。団体競技だ。あの子もみんなと力を合わせているのだろう。

あんなに明るく利発だった子が、こんなにも頑なになったのは何故だろうと、一年位前からのことなどふりかえってみた。家庭の手伝いのことで揉めた。家庭内の挨拶の事で言い合いになった。韓国と日本の生活の違いのこともあった。現代の自由勝手な考え方、生き方の基本のこともあった。あつた。家庭で親と子だけ、爺婆は入れないのかなども話の中味だった。最初は当り前の会話だったと思う。だんだん声が荒々しくなっていたのだ。売り言葉に買い言葉に拍車がかかり、強きのあの子と負けまいとする私。大分長いこと続いた。その中押し合いへし合いになり、余りに残酷な言葉が浴びせられたので、手を出してしまった私だった。よく分かっているがどうしようもない。

「お婆ちゃんはい小さい子との遊びは出来ても、小学生の気持ちは分かんないよね」の言葉が勝負を決めることになって、落着いたかと思つたがその後冷戦が続くことを想像もしなかった。お互いに深い傷を負つたのだ。「鷺塚・鰻塚」の鷺と鰻のようにならないように、生長していく道を求めていこう。繰り返さない道を捜していこう。

「赤団！バンザイ！バンザイ！」と場内に響き渡っている。しばらく眺めていた。

この暗から抜け出すのにどうしたらよいか考え

もした。「ああしよう。こうしよう」と考えたが干渉になると不味いのでやめることにした。それでも何故か詰まらない。遣りつ放しのことを口にはせず、手紙をそえることにした。

「あの上から落ちたのか。一人で飛び上がってみな」「自分の尻はふくんでしょ。ドアも戻してよ」「あんたがいなきや一人前じゃないんだから並べてよ」物語り風に考えたり、ユーモアっぽくというつもりでも、これも干渉の一つかとやめることにした。

「バンザイ。バンザイ」と声があがる。終つてもじつとしていた。余韻の残る会場にいたかった。若い中学生のパワーを貰いたかった。

鼻歌をうたいながら帰りの道は涼涼しくペタルを踏んでいた。暑かった日々が続いたが、五時前後から起きて、夜十時頃までよく動き続けた。ゆつくりする場所もなく横になれなかったが、座つたまま居眠りをしていた自分を老いたとも思う。人生の中でも今年は、婆さんとしての勉強をした年だった。婆さんとして自然体の積りでも相手に通用しないこともあるのだろう。

庭を眺めていたら、朝顔が目に入った。今年は蒔くことも、草をとることもなかった。手を立ててやることもなかった。雑草の上を這いながら伸びていったようだ。手をかける心のない人の庭を飾る朝顔は幾つか咲いて凋んでいた。

「ご免ね。ご免ね」と何度か言っていた。人の心によって六年前と全く違う扱い方でこんなに姿が変わるものなのだろうか。それでも貧弱な花は毎日二つ、三つと変わらず青く咲いている。なんていとおしいことだろう。あの子への心づかいも焦らずいこう。そうすれば私の大きくなってしま

った心の穴も少しづつうめられることだろう。始めから一緒に住んでいる子も、途中から一緒に住み始まった子も、遠く離れている子も、子たちへの思いはかわらないものです。

石岡海軍航空基地

小林幸枝

戦時中、石岡に飛行滑走路があったと父から聞いたことがり、詳しく聞こうと思つていて忘れていた。思い出して、茨城県の戦争遺跡の本を見て、ようやくその事実を知りました。

石岡海軍航空基地は新治郡石岡町（現在の石岡市東ノ辻）にありました。石岡駅の東1キロのところに、かつての滑走路跡を利用した直線道路があります。

周辺の林には、U字型に高く土が盛られた無蓋掩体壕がのこされているそうです。

《東府中掩蔽壕群》

一号掩蔽壕は林の中にあり、長辺26メートル、短辺19メートル、高さ1.5メートル。

二号掩蔽壕は民家の庭の一部になっており、長辺23メートル、短辺は欠失し実測不可。高さは1.5メートル。

《八軒台掩蔽壕》

レジャー施設脇の茂みの中にあり長辺18メートル、短辺15メートル、高さ2.5メートル。

現在は、住宅が建てられ、道路となっていて滑走路の跡とは思えなくなっていますが、直線の道路を見ると、飛行場跡と言われれば、そうかと領

けます。

歴史というと千年前とか何百年前のこととかばかりを思ってしまうですが、70年前のこうした事も大事な歴史です。大きな意味を持つものではないと思いますが、こうした歴史を知らず案内標識柱などを市のあちこちに設置することも、歴史の町というならば必要ではないかと思いました。

こうした案内柱が何処の街角にも立っていたら流石歴史の町と実感してもらえるのではないでしょうか。

県指定文化財(7)

兼平智恵子

去る九月十九、二〇、二十一日石岡のおまつりは天候に恵まれ石岡市内中心市街地は四十五万一千人(石岡市観光課より)のお客様をお迎えしました。

華やかさを誇る人形の乗った十一台の山車では

おかめさんの やさしくやさしく家内安全

ひよつとこの 笑って笑って無病息災

きつねさん こぶしふりあげ五穀豊穡

石岡ばやしにのって踊りました、演じました。

三十一台の幌獅子、悪霊退散願って雄々しく勇

ましく舞いました、舞ました。

今年も祭神様と喜びを共にしました。

常陸國總社宮に隣接する石岡市ふるさと歴史館には三日間で二百人余りの皆さんが石岡の歴史を尋ねて下さいました。元の静けさの中で市民の皆さんは来年のおまつりを心待ちして過ごして行きます。

今回の県指定文化財は地下の正倉院といわれた鹿の子C遺跡から出土しました漆紙文書についてご紹介します。

○鹿の子遺跡出土

有形(歴史資料)

漆紙文書一括

平成十四・一・二十五

石岡市教育委員会発行「石岡市の文化財」によりますと：鹿の子C遺跡から出土した漆紙文書は、全国でも最多の二八九点もの数にのぼる。漆紙文書は、漆桶やパレット用の土器をいれた漆液の状態を良好に保つ為に「ふた紙」として用いられた紙に、漆がしみ込んで地中に残ったもの。当時、紙は非常に貴重であったため、役所で使用済みになった公文書を再利用したのである。

漆紙文書の内容により、田籍関係文書・計帳文書・習書・具注暦の4種に分けられる。これらの文書から判読できる文字の量やそこから歴史像が明らかにされる点において、一級の資料である。

地下の正倉院といわれた鹿の子C遺跡は日本道路公団による常磐自動車道建設に伴う記録保存のため、昭和五十四年十一月から五十七年二月までの間に発掘調査されました。その結果、奈良時代の終わりから平安時代初めにかけての特殊な性格を持つ遺跡であることが判明しました。特に鉄、銅製品を制作する工房跡が極めて注目になるもので、農耕用具や武器、武具が出土したことから、当時の社会的背景として蝦夷侵略のための前線基地であると考えられたり、国衙に供給する製品を作るための付属工房であるとも考えられました。

一方、この遺跡の名を世に広めたものが、漆紙文書でした。出土した漆紙文書は半月状の形で赤

外線カメラによる判読で初めて当時の行政文書であることが判明しました。この文書は漆を所蔵した容器の蓋紙として使用されたもので、そのため円形、半月形として残存し、今に伝わりました。

この文書には当時の戸籍や稲を貸し付けた時の帳簿などが克明に書かれていました。この戸籍などから当時の常陸国には二十二万から二十四万人の人口があったと推定されています。

現在、鹿の子C遺跡の主要部分は常磐自動車道となつて消え果ててしまいましたが、主要部分となつていてあつたに石岡市教育委員会の案内板がたてられています。

尚、常陸風土記の丘の資料館と石岡小学校敷地内にある石岡市ふるさと歴史館には鹿の子C遺跡から出土した鉄、銅製品、土器等の遺物、そして、貴重な漆紙文書はレプリカとして展示されています。

また風土記の丘の有料エリアには、発掘された建物の跡である住居ブロック、工房ブロック(鉄品や銅製品を作った作業場、官衙ブロック(役所的機能を持つ)等の一部分が復元されています。

常陸風土記の丘の資料館と復元家屋(有料大人三百十円小人百五十円、石岡市ふるさと歴史館(無料、どちらも月曜日は休館となります)。

どうぞ平安びとの偉業に思いをはせてみませんか。

・野を染めてコスモス
秋色香るキンモクセイ 智恵子

【風の談話室】

陸平を「イシ」する会の田島早苗さんの投稿がまだ叶わないのは些か淋しい思いでいるが、今月も京都の今井直さんより投稿が届いた。

地方の小さな会報ではあるが、風が流れ込んでくれることは編集室としては、大変ありがたく嬉しいことである。

風が流れればそこに景が生れ、呼吸することの喜びが生れる。

《読者投稿》

私の国府巡り・歌碑 京都府精華町 今井 直

籠もよ み籠持ち 堀串もよ み堀串持ち
この丘に 菜摘ます兒 家聞かな 名告らさね：

『万葉集』冒頭歌である。題詞に「泊瀬（はつせ）の朝倉の宮に天の下知らしめす天皇（すめらみこと）の御製歌」とある。5世紀後半の雄略天皇の作だ。「こもよ・みこもち・ふくしもよ・みぶくしもち」の歌い出しは、3・4・5・6音と一音ずつセリあがる韻律で、可憐な乙女に人目ぼれた心の高まりが感じられる。七五調とは別のリズムであるこの技法は、現代の歌謡曲にも「宮古 釜石 気仙沼」（森進一・港町ブルース）や「津軽 八戸 大湊」（北島三郎・風雪ながれ旅）などと受け継がれている。万葉歌が宴席で披露され広く愛唱されたのは、メロディがあったに違いない。「多摩川にさらす手づくりさらさら」（巻14-3373）や「つらつら椿にっらつらに」（巻14-3373）などの語呂はその証拠だろう。

楽譜が考案されたのはずっと後の世だから、やがてメロディはわからなくなり、和歌集に歌詞だけが残った。

雄略天皇の朝倉の宮は、古代信仰の聖なる三輪山（奈良県桜井市）の麓にあったという。青垣の山裾をさす「山本」の圧縮形が「やまと」原義だという説がある。この辺りは四方からの陸路が交差する重要なターミナルだった。北にわが国最古の山の辺の道が、南は飛鳥から巨勢（こせ）を通り紀ノ川沿いの南海道へ続いていた。東は伊勢へ向かう初瀬（はつせ）街道、西は横大路が葛城山麓まで直線で伸びており、竹内峠越えで難波に入る最短の道だった。また、初瀬の山間から大和川が奈良盆地に流れ出る所から水運が発達し、下流の竜田を経由すれば、峠を越えずに難波津と物資の運送が可能だった。さらに瀬戸内を通って大陸との外交ルートにつながり、遣隋使節団もここから出発し、中国の優れた技術や文化が日本に上陸した地でもある。

そのため人や物産が多く集まり、海柘榴市（つばいち）と呼ばれる交易の場が発達した。市がたつ日は賑わいを見せ、若い男女が会って互いに恋歌をかけあい婚活をする歌垣も行われた。筑波山と同様に古代の合コンが繰り広げられたことが『万葉集』に見られる。

宮跡と推定される白山神社の境内に、「籠もよみ籠持ち」の歌碑が、「萬葉集發耀讃仰（はつようさんぎょう）碑」と並び建っている。桜井出身の評論家・保田與重郎（やすだよじゅうろう）は揮毫した。なお、万葉集巻12の首の掉尾を飾るのは大伴家持の歌。

新（あた）しき 年の初めの 初春の

今日降る雪の いやしけ吉事（よこと）

当時、家持は因幡の国司であり、因幡国庁跡（鳥取市国府町）にその歌碑がある。万葉仮名で刻まれた3首もある太い柱状の自然石だ。

新年之始乃波都波流能

家布敷流由伎能伊夜之家餘其膳

歌碑は、大正時代に当時の鳥取県知事の努力により建てられ、当地は万葉集終焉の地といわれる。

「記紀万葉のふるさと」と銘打ち、観光に力を入れていた桜井市は、昭和40年代から多くの歌碑を建ててきた。記紀や万葉の歌ごえは単なる文字ではなく、風土に根づいた文化であるとして、市民は歌碑を誇りにしている。柿本人麻呂や額田王などスーパースターたちの歌を、現代の著名な文化人がそれぞれ染筆した。建碑場所が大和青垣国定公園や風致地区内という制約があり、木陰や草むらにさりげなく野仏のようにひっそりと心を心がけたという。

山の辺の道は、青垣の山裾をたどり、緩やかな起伏の多い小径である。海柘榴市と石上（いそのかみ）神宮（天理市）を結ぶ約12kmに、歌碑が38基も設置されている。沿道には古社寺や巨大古墳・旧跡が多く点在し、四季の草花が彩りを添える。葛城の山なみや大和國中ぐんなかの景色が広がり、なにか懐かしい気分にな。柿やみかんの無人スタンドで道草を楽しみながら、ゆったりと休日をごす姿が多くみられる。

山の辺の道は見どころいっぱいだが、とりわけ檜原（ひはら）神社は三輪山をご神体とし、玉垣内には本殿も拝殿もなく三ツ鳥居だけ。西側の正面に二上山が一望できる。駱駝のこぶのような形をした山で、右側の雄岳山頂には悲劇のヒーロー・

大津皇子が眠っている。彼岸のころ雄岳と雌岳の間に夕日が沈む絶好の景勝地である。

柿本人麻呂はこの辺りに巻向娘子（まきむくおとめ）という愛人を秘かに住まわせていたという。足繁く訪ねては、二人して恋を語りながら里山を散策した…、こんな逸話をたとえ知らなくても、私たちの日常生活には何ら差し支えない。興味の無い人からは、知っているからといってそれがどうしたと言われそう。しかし、万葉びとはどのようにこの風景を見ただろうと思いを馳せれば、山の姿・川のせせらぎすら、新鮮でより豊かなものに見える。私たち現代人が失ってしまったものを、教わることが数多くあるのではなからうか。

神社を西へ少し下って行くと井寺池。水面に映った三輪山の神々しい姿は息をのむ美しさだ。池の堤に小さな石碑がうずくまり、『古事記』に記された日本武尊の望郷の歌が、川端康成の筆により刻まれている。

大和は 國のまほろば たたなづく

青かき 山こもれる 大和し 美（うるは）し

揮毫の依頼を受けて川端はこの地に立ち、三輪山を眺めながら弁当をひらくのに児童が腰掛けられるようにと希望した。だが揮毫する前に亡くなったため、ノーベル賞授賞式での記念講演「美しい日本の私」の自筆原稿から拾い集めたという。だから、毛筆ではなくペン字である。

万葉歌碑といえ、阪大で長年『萬葉集』を講義し、万葉旅行に学生たちを引率し、万葉故地の保存にも尽力した犬養孝を忘れることができない。万葉の歌枕は奈良を中心に近畿地方が多いが、阪大の万葉旅行は全国津々浦々を巡っている。教授が揮毫した歌碑は百三十一基におよび、すべて楷

書の万葉仮名で、すこぶる達筆である。

犬養教授の万葉旅行に一度だけ遭遇したことがある。もう20数年前、明日香の甘樫丘（あまかしの）におどった。最晩年の教授は車いすに座ったまま、学生たちに抱えられ丘を登ってきた。そして一息つく間もなく、独特の節回しで朗々と唄いだしたのである。

香具山は 畝傍を惜（を）しと

耳成りと 相争（あひあらそ）ひき…

テレビでよく見た声に艶のある犬養節だった。続けざまにいくつか万葉歌の講義が始まった。「新しき年の初めの初春の」は「の」がリズムカルに連続し、雪が後から後から降り積もってくる感じがする、というような内容だったと記憶している。授業料も払わず傍聴できて、ちよっと得をした気になった。

ちなみに「新しき年の初めの初春の」をパソコンで文章校正のチェックをすれば、「助詞」の「の」の連続」とエラー表示され、修正候補として「新しき年の初めに初春で」とおせっかいな添削例が…これでは雪は降り積もらない。続いて、「きようふるゆきのいやしけよごと」と入力して変換キーを押すと「恐怖ル由紀の卑しげ夜毎」。何じやこれは？あかん！新しいパソコンに買い換えよう！

養生日記（詩二編）

堀江実穂

「あきらめない」

ほとんど落ちていく自分の姿を見た
色々なものを失っていく
悲しい自分がある

無くしたものが多ければ多いほど
得ているものが多いことに
気付けなくなっていく

後を振り返ると悲観的な気持ちしか生まれてこ
ない

前に進めなくアップアップしている自分が悲し
い

落とした夢を拾う事ばかり考えてしまい
夢を紡ぐことを忘れている

後を見るのはもう止めな、と言いつつも
辛かったことを振り返っても夢は紡げない
目覚めた朝に一日の希望を想い前に進みたい

ギター文化館

CONCERT SCHEDULE

10月 4日（日） 河野智美 ギター・リサイタル
10月 18日（日） 村治奏一 ギター・リサイタル
11月 1日（日） 高野行進 ギター・リサイタル
11月 15日（日） 朴葵姫 ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

「きぶり」

このアパートに越してきて、一人暮らしを始めて3年が過ぎた。でも食事の調理は出来ない。

幻覚、幻聴のため火を使うことができない。勿論、包丁を使うことも出来ない。

ここで自分が料理をしたことはない。

ヘルパーさんが買ってきて来てくれるレトルト食品を電子レンジで温めるだけ。

自分の台所の味を楽しむことは出来ない。

台所にゴキブリを見たことがない。

料理のクズがないのだから、ゴキブリが来ても生きてはいけない。

ゴキブリも寄りつかない家。

最近、このアパートに友人が越してきてくれた。友人が、混ぜご飯やポテトサラダ、きんぴらゴボウなどいろいろ料理したものを作って持ってきてくれるようになった。

このアパートで初めての家庭料理を口にすることができた。

矢張り温かさが違う。

料理する手の温かさがある。

食糧ではなく食べ物だ。

私の部屋に、生活の臭いがするようになった。そうしたら最近凄い事が起った。

黒くて大きくてガツシリとしたゴキブリの一匹が現われたのだ。

部屋の中をカサカサと走って行く。

出た。ゴキブリが出た。

思わず涙が出てきた。

この部屋に生活の臭いが生れてきた。

ゴキブリの走りをいとしいもののように見つめる私がいる。

堀江実穂さんからは、毎月4〜5点の詩が送られてくる。その中から、こちらの独断で選択し掲載させて頂いている。今月は、少し動きの変化が見られる投稿が何点か寄せられ、選択に些か苦慮したが、「あきらめない」と「きぶり」を掲載させて頂いた。

《一寸一言・もう一言》

||一寸一言||

伊豆の踊り虎

打田昇三

平治の乱で敗れた源頼朝少年は死刑を免れた重罪人として伊豆に流された。関東に居た武士団の多くは、かつて源氏に従っていた者たちであるから平家の目を盗んで経済的な援助も期待できる。頼朝は源氏に心を寄せる武士や其の家族に庇護されて、地元の温泉に浸かりながら囚人らしく無い恵まれた暮らしをしていたのではないか？

源頼朝の監視役を命じられていたのは地元・伊豆の藤原系伊東氏と、平家末流の北条氏である。

伊東氏の主は祐親と言ひ、本来は宗家相続の立場に無い人物であったが相続人である甥が若かったのでは是を騙して都に行かせ、主家乗っ取る形で広大な領地を抑えた。祐親には何人かの娘が居り是がいずれも親に似ない良い娘であった。祐親はその一人を相続人と形だけの結婚をさせ、都へ追い払ってから領地を自分の名義に書き換えた。

都へ出て来た青年は平家の嫡男・平重盛に仕えていたから主人に似て優雅な武士になっていた。青年の名は伊東（工藤）祐経と言う。其の頃、郷里伊豆に残して来た母親から祐経に便りが来て、

広大な領地が叔父の伊東祐親に横領されたことを知ったのである。祐経は職を辞して帰郷し、財産相続の訴えを起こしたのだが、狡猾い叔父には勝てず妻も離縁された。是に義憤を感じた祐経の家臣が伊東祐親暗殺を企み間違えて息子の祐泰を射殺してしまった。祐泰の遺児が曾我兄弟である。

その頃、囚人ながら自由に暮らしていた源頼朝は伊東祐親が平家の命令で京都勤務をしている間に祐親の娘（工藤祐経の妻となった女性の姉妹）と知り合い、男児をもうけた。一年ぶりに京都から帰って来た祐親は孫を見て「世に無し源氏の子を生かしては置けない！」と、無残にも幼子を伊豆山中の谷川に捨てさせ、さらに頼朝を殺害しようとした。それを祐親の息子が知って頼朝を逃がし頼朝は北条氏を頼ることになるのである。

谷川に捨てられた子（源頼朝の子）は通り掛かりの人物に助けられたことになっており、其の子孫と称する家系が有ったり助けた人物が平維盛の家臣であったりと諸説が伝わる。徳川時代に秋田からがすみ（がうら）市に移って来た旗本（交代寄合

||参勤交代をする旗本||の本堂氏がそうである。

血縁的に言えば源頼朝と工藤祐経は義兄弟であるから、頼朝が天下を取ってから工藤祐経が側近として力を得ても不思議ではない。曾我兄弟は因業（い）じい伊東祐親の孫である。北条氏の庇護を受けていた。私怨で工藤祐経暗殺を狙い富士の堀野の仇討を仕掛けたことになっているが、この事件は実際には誰か？が企んだ「源頼朝暗殺未遂事件」だと思ふ。曾我兄弟は利用されたのであろう。

事件の時、富士の裾野は暴風雨で暗闇である。頼朝の幕舎と工藤祐経の幕舎は並んで建てられていた。他の武将の幕舎も隣接して建てられていた

のであるから、出入りを許されていない曾我兄弟が案内も無しに仇の幕舎に近づくことなど出来る訳が無い。工藤祐経は殺害されたが、本来の此の事件は失敗し謎の犯人たちが源頼朝の暗殺に成功するのは、それから六年後のことになる。

殺された工藤祐経以外で、この事件により損をしたのが常陸国に膨大な領地を持っていた多気大掾氏である。「いざ鎌倉！」で駆けつけなければならぬところ小田氏に騙されて城に籠った。当然、領地は没収され、伊豆に軟禁された。武士は合戦以外にも見え無い敵が居たのである。

18歳に選挙権

菅原茂美

世界的傾向もあり、日本でも18歳に選挙権を与える事になった。それが良いかどうかは私には、よくわからない。しかし、高校生のほぼ半数が進学する時代となり、懸命に受験勉強に励んでいるのに、どんな政党・人物を選んで良いか、検討の時間など殆どないのが現状であろう。

私の孫娘は、高校生になってからは、あれほど好きなお祭りにも出ず、何と誕生日の祝いを家族がセツトしても、自分で決めた今日のノルマが捗（はかど）らず、誕生翌日の午前2時頃、皆で祝い、励ました事があつた。こんな状態なのに、どんな選挙権を行使する事やら…。

それはさておき、今度は自民党内で、選挙権が18歳に引き下げられたのだから、飲酒・喫煙も「大人の象徴として引き下げるべきだ」という意見が出されたという（財務省の増税狙いか？）。諸外国で18歳から許している国は多数ある。しかし、ノル

ウェーは、ビールとワインは18歳からOK。だが、蒸留酒は20歳から…という国もある。

日本では、大学のサークル活動の新人歓迎会などで「一気飲み」を強要され、嘔吐や死亡例さえも発生している。未成年者飲酒・喫煙禁止令など、守られず18歳で許可しても今度は、それ以下の禁止が守られない悪循環を繰り返す心配がある。高校生に飲酒や喫煙が自由化されれば、勉学に集中などできるであろうか。

問題は、酒やタバコには、強い依存性があり、若い人ほど影響を受けやすい事だ。酒やタバコが血管壁を硬化させ、脳梗塞・心筋梗塞の元凶である事をしっかり教育するべきである。飲酒・喫煙の若齢化に、私は反対である。

もう一言！！

毒蛇の居る空港

打田昇三

有名なのはアフリカ大陸に在っても何となくヨーロッパ的な都市カサブランカ（モロッコ）の広場であるが大道芸で猛毒の蛇を使う芸人がいる。蛇が逃げ出したならば、周りを囲んでいる観客の誰かが犠牲になると思うけれども特に問題は無いらしく、芸人も蛇も真面目である。蛇使いも心得ていて、日本の毒蛇のように有毒かどうか見分けがつかない蛇は使わず、コブラの様に「俺は毒蛇だ！」と言う顔をした蛇が働かされている。蛇も必死だと思うが、扱う芸人も一歩間違えば喰われるであろうから真剣である。

然しながら、大道芸の展開される広場ならまだしも、大空港の施設で堂々と演技している毒蛇が

居たのには驚いた。許可証は持っているらしいのだが、空港施設の内部というのは毒蛇の勤務場所としてはふさわしく無い。心なしか蛇のほうも落ち着かない様子で逃げることばかりを考えているように見えた。観客にはより危険である。

どうして、そういうことがまかり通っているのか考えてみると此の空港は熱帯地方に在って中近東からヨーロッパまで行く空路の乗り継ぎ中継点になっている。つまり待ち時間が長いのである。場合に依っては一〇時間以上も待つ乗継客が居るから退屈しのぎに毒蛇が協力しているのである。

恐る恐る「御苦労さん」と言う他は無い。

大英帝国の幻想

菅原茂美

歴史や芸術など、私はトンと音痴であるが、科学論文など読むと、英国王立学会は、かなり傲慢な感じがする。例えばダーウインの進化論はある程度理解はしたが、オメオメと引き下がるわけにはいかぬ。新進気鋭の考古学者がアフリカで化石人骨を発掘し学会報告すると、あんな野蛮なアフリカで、この高尚な人類が進化するわけがない。もし、人類が下等な動物から進化したとするなら、ヨーロッパ、少なくとも、この大英帝国において進化したに違いない。そういう事でボツにされた論文は多数あつたという。後にその論文がミッシングリンクを埋める重大な発見であつたというのに…。

ヨーロッパを統一市場で…という事で欧州連合（EU）は設立されたが、英国内にはEU加盟反対派が多数いる。EUの基本原則は「域内の人の

移動は自由」のため、EU加盟の東ヨーロッパからの移民が年々増え続けるのが気にくわない。2014年には26万8千人で、全移民の4割を占める。これらの人々に英国人同様に社会保障制度を適用しなければならぬ。ならばEUを離脱した方が増しだとの理屈である。

英国は第二次大戦の戦勝国であるが、実質はソ連と米国に負う所が大きいのに、英国の独力で勝利したと幻想する人が多数いるとの事。かつての大英帝国時代にアジア・オセアニアや米大陸を植民地化した面影が、今でも残っている。「太陽の没する所がない」などとうそぶいていた時代の幻想に今でも酔っている感じとの事。国民投票の結果は「EU離脱・継続」は半々である。自信過剰と非難する評論家多数とか…。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第三 (一)

金渡(かねわたし)のこと

馬鹿政治家、悪徳官僚、間抜けな高官などが中途半端な怪しい金を受け取って身を滅ぼす事例が多いから現代にも通じる裏話かと思っただが、是は前の章段に引き続き仏心が篤い平重盛が仏教の本場である中国の寺に多額の金を届けて死後の極楽往生を願う…という話である。冷静に考えれば是ほど自分勝手なことは無い。其れだけの金を日本の寺ならま

だしも、わざわざ中国の寺に寄付する余裕があるならば庶民の救済にでも充てるべきではなからうか？仏心も自分だけの極楽往生を望んでいては空念仏になりかねない。

平家一門では無いから余計なことを考えるのは止めて本文に戻ると、以前から極楽往生を願っていた灯籠大臣こと平重盛は思った。「この狭い日本で来世に果報を齎(もたら)す大きな善根(善行)を施している、それが長い未来に亘って子孫に反映されることがあるだろうか？それならばどの様にしても他国(と、言っても中国しか知らないが)の地に善根を施し後世を弔って貰おう…」

そこで安元年間(治承年間の前、二年間)に、九州から一人の船頭を呼び寄せた。原本では船頭の名が「妙典」とされているが、船頭以外に使者となった者が居るらしく、その者が法華経などを持って中国へ渡ったので「法華妙典」と呼ばれたらしい。どちらも使者に違いないので原本に従うと、平重盛は人払いをして妙典に対面し、黄金三千五百両を並べて「お前は正直者なので五百両をあげるから、別に三千両を持って宋の国に行き、育王山に参って二千両を宋の皇帝に献上し、僧侶に千両を与えて、それらの資金で田地を買い求めさせ、その収穫の一部をもって我らの後世を弔うように依頼せよ」と命じた。

育王山は「いおうさん」と読み、中国の浙江省(せつこうしょう)上海の南方に在った禅宗(臨済禅)の寺である。妙典はこの命令を受けて艱難辛苦の果てに宋の国に渡り、育王山の住職である高僧・仏照禅師徳光に面会した。先ず最初に三千両の黄金を見せたから禅師も感嘆して「地獄の沙汰も金次第」という日本の諺を理解してくれたのである。使者・妙典を通じて平重盛の願いは宋の皇帝に聞き届けられた。

皇帝は大いに感動されて五百町歩(約五百ヘクタール)の田を育王山に寄進してくれた。その為に、日本の大臣である平朝臣重盛公(たいらのあそんしげもりこう)が来世は極楽浄土に生まれるという祈願は、現地において未だに(平家物語が書かれた頃まで)絶えないということである。ただし宋の国はマルコポーロの時代頃に滅亡して、中国はジンギスカン系の王朝に変わるから平家物語原文の「…今に絶えず…」は読まないことにした方が良い。

法印問答(ほういんもんどう)のこと

既に「医師問答」があり此の章段が「法印問答」であるから平家物語の作者は問答好きなのかと疑ってみたが、此の後に「問答」の付く表題は出て来ない。逆に見れば是からは問答などしている暇は無く平家物語本来の？武力行使が中心になるのであろう。平和主義には反するが、読む立場からすれば、坊さんたちの世界である仏教的な因果話より動きの速い活劇の場のほうが面白い。

表題でも分かるように此の章段の主役は僧侶の最高位にある法印さんであり、活躍するのは既に巻一「鹿が谷」で出て来た「淨憲法印」である。鹿が谷では後白河法皇から「平家打倒」の密議を聞かされて腰を抜かしたけれども、見捨てる訳にもいかなから法皇のプレンに留まっていた。

平家の方では嫡男で優れた人物とされた平重盛が、人生に失望して若死にしまったから父親の清盛は心細くなつて福原の別邸に居て門を閉ざし引き籠りの日々を送っていたのである。若者ならば兎も角、爺さんの引き籠りは痴呆症を早めるだけである。そ

のうちに治承三年（一一七九）旧暦十一月七日の夜に大地震が起こった。気象庁が無かったから震度を測ることは出来ずに「大地夥しく（おびたしく）激しく動いて久し」と言う子供でも言える政府発表があった。

神祇官所属の、巻第二「座主流」に出て来た陰陽頭・安倍泰親が久し振りの仕事に張り切って内裏に駆け込み、次のように科学的根拠の無い報告をした。「此の度の地震を占いましたところ、その慎み（因果関係）は軽からず、陰陽道で言えば金匱経（こんききょう）に当たります。是は、〃年を得ては年を出ず、月を得ては月を出ず、日を得ては日を出ず〃というもので、ことのほか火急の大事でございます」：言っている内容は支離滅裂であるが、安倍泰親が涙を流しながら報告したので、宮中の取次役である伝奏（でんそう）も顔色を変え天皇も心中の驚きを隠せなかった。

ところが公卿の中でも若い者たちは天変地異の被害というより庶民の苦勞を余り知らないから、陰陽師の恐れようを見て「安倍泰親は何を泣くほど恐れているのだ？此の程度の地震など何事があるうか」と勝手な事を言って笑いつつ。しかし此の泰親という陰陽師は、映画でお馴染みの阿倍晴明から五代の子孫であつて、天文学と言うより天体学（から判断した易占）の奥義を極めていたから、その予見するところは筋道立てて明確で一事も違つた事は無かつた。人々は「神の子」と称していたのである。かつて此の泰親が落雷に遭遇したことがあり着衣の狩衣（普段着）を焼かれながら、その身は全く無事であつたと言われる。

其の様に昔から今（平安時代末期）に至るまで誠に得難い陰陽師なのである。（平家物語の作者は、安倍泰親の恐れが、この後に起る平清盛のクーデターや平家滅亡を伴う世相

の大変革を予知したもの、と言いたいのであろうか）

その心配に応えるように大地震から一週間後の十一月十四日には、相国禅門こと平清盛が突如として福原から数千騎の軍勢を率いて都へ入る——という噂が広まつた。事の真偽や噂の出所はハッキリしなかつたけれども、都中の人々が恐れ戦いて（おののいて）いたところへ、親切な人？が解説をしてくれて「入道相国（清盛）は朝廷を恨んでいるのであろう！」と言いつ触らしたようである。

それを内々に聞いたのであろうか関白の藤原基房が急に宮中にやって来て「此の度の相国禅門が都入りをする目的は、どうも此の基房を討ちとるためであるような気がします。どの様な目に遭うのでしょうか！」と高倉天皇に泣きついた。天皇も驚いたが為す術（すべ）を知らないから「そなたが如何なる目に遭う（清盛に狙われる）のも、私が狙われるのも同じことであろう」と涙を流すだけである。原文には「御涙を流させ給ふぞ忝（かたじけ）なき」とあるが、感激している場合では無い。天下の政（まつりごと）は天皇・摂政関白の判断によるものであるのには（入道相国が口を出すのは）どういうことであらうか？天皇家の氏神である天照大神、藤原氏の氏神である春日大明神のお心が知れない。（神慮が推測し難い）平家物語は其の様に書いているが、政治の本来は「国民の為にする」ことであるから、天皇や藤原一族が困つても神様が気にする必要は無かつた。

翌日の十五日には後白河法皇の許にも「入道相国が朝廷を恨んでいることは間違いない！」という噂が伝わってきた。法皇は慌てて静憲法印を使者として清盛の許へ行かせた。此の人は、巻一の「鹿が谷」で後白河法皇のお供をしていて平家打倒の謀議を知り驚いた人物である。法皇も本当は自分で行きたい

のだが、清盛を恐れているから行きたくない。しかし弱気を見せると負けであるから静憲さんを派遣して、強気で次のように言わせる予定で平家の屋敷に行かせたのである。

「近頃は世間が何となく落ち着かず、人々の心にも不安がある。法皇も天皇も是を嘆いている。そう言う時期では有るが、平家が確りしていれば何の心配も無いのだが、平家の様子は天下を鎮めるどころか、いたずらに軍備を拡張して武力を誇示し、そればかりか朝廷を恨むなどと公言しているようで誠に遺憾である。是は何事であるか！」

ところが清盛は法皇の使者である静憲法印に会おうともせず朝から夕方まで待たせておいた。折角、長いセリフを覚えて来た静憲さんの努力も無駄になつて「是はダメだ」と気が付いたので平家の屋敷に居た源大夫判官季貞に「勅定（天皇又は上皇・法皇の仰せ）である」と断つてから言うべきことを言つて戻ることにした。源大夫判官季貞は「巻二・少将乞請」の場面でも嫌な取次をさせられている気の毒な係である。

すると静憲法印が玄関を出ようとする間際に其れまで様子を見ていた清盛が現れて来て「法印を呼べ」と命じた。此の辺りが清盛の芝居がヘタなところで底意地の悪い印象しか相手に与えない。呼び返された法印は「何を今さら」と思いながら戻ってきた。法印の顔を見た清盛は「お待ちせ！」とも言わず先制攻撃をかけるように口を開いた。

「なあ、法印御坊よ。此の淨海（清盛）が是から言うことは間違っているのか？（聞いてくれ）まず、内府（内大臣・重盛）が亡くなったことは当家（平家）の運命を推し量るについても悲しいことであるが、此の入道は其れを堪えて過ごしてきたのである。それは御

坊にもお分かり頂けるであろう。思えば保元の乱から反乱や謀反が続いて朝廷はお心が休まらない日々であった。そう言う場合に、此の入道は大まかな事を指図するだけであつたが、内府は自ら事態の收拾に当り、身を碎き命を掛けて朝廷をお守りし御奉公をしてきた。戦の他にも即位の儀式、女御の入内（ゆだい）宮中に入る儀式皇子誕生の儀式などを始めとして日常の政務はもとより多くの大事を無事に果たしてきた。是ほどの功臣は他に在るまいと思う。此の事に照らして故事を思えば、唐の第二代皇帝である太宗は賢明な家臣の魏徵（ぎちやう）に死なれて悲しみのあまり『昔の殷宗（いんそう）殷はBC一七〇〇〜BC一一〇〇頃の中国古代王国、宗は二十代皇帝』は夢に依り良い家臣を得たと言うが、今の朕（私）は夢が醒めて後に賢臣を失う』という碑の文を自ら書いて魏徵の墓に建てたと言う。同様の例は我が国にもあり、鳥羽上皇は乳母の子であつた藤原顕頼（勸修寺流、権中納言顕隆の子）の死に際して大いに嘆かれ、予定されていた石清水八幡宮への行幸を延期され遊び事を控えられた。多くの例は臣下の死を主君が嘆かれ弔意を表すことが普通である。そうであるから君主と臣下との関係は親子の関係より深いと言われるのである。それなのに（法皇は我が子・重盛の四十九日の日に八幡（石清水八幡か？）に行かれて遊びごとをされた。平家に対する弔意などは全く見えない。たとい清盛の悲しみに配慮が無くても亡き重盛の忠義に報いられて然るべきであろう。重盛の忠義を忘れたとしても、どうして清盛の嘆きに配慮してくれなかったのか。その為に平家は父子共に朝廷に背くという評価になり面目を失うことになった―是が一つ（の恨みである）。次に、中納言の職に欠員が生じた際に藤原基通が是を

所望し、この入道が随分と推挙したにも拘らずお許

しが無く、僅か八歳の藤原師家を補任されたことは如何なる仕打ちであろうか。たとい此の入道が個人的な要望をしたとしても、一応は意見を聞いて下さるのが道理では無いか。ましてや基通と師家とでは（基通のほうが）家格と言ひ、位階と言ひ道理に叶ひ異議の無い状態で有つたのに、それを変えてしまわれしたのは此の入道に対する個人的な嫌がらせとしか思われない―是が一つ。

さらに新大納言成親以下が鹿谷に集まつて平家に謀反を企てた事件は、彼らだけの個人的な計略ではなかつた。どう見ても法皇が黒幕であつたことは明らかである。今さら改めて言うことでも無いが、朝廷は七代まで此の平家を見捨てることは出来ない筈なのである―（巻第一、教訓状でも清盛は同じような事を言つて法皇の無情を嘆いている）それなのに、この清盛が六十を過ぎて寿命が残り少なくなつた時期に平家を滅ぼすような企てをなさろうとする。子孫が相次いで朝廷に召し使われることは有難いけれども、老いて子を失うのは枯れ木に枝が無いように悲しい。今は残り少ない此の世に氣を使つてもどうにもならないから、世の中がどの様になるうともかまわない、と思つてゐる」

受け取りように依つては自暴自棄のような言葉で怒りを表わし、そして涙を流したので、静憲法印は恐ろしくもまた、哀れに思えて返事も出来ず冷や汗を流していた。こういう場合には誰でも暫くの間は黙っているしか無いけれども、法印は法皇の近臣であり謀反には参加しなかつたが鹿谷には行つていたから陰謀の仲間に見られて此処で監禁されるのではないかと、龍の髭をなでたり、虎の尾を踏むような不安な気持ちでいた。しかし元来が気丈な人であるから、気持ちを落ち着かせてから口を開いた。

「確かに仰せられるように朝廷に対する平家の御奉公は浅くありません。入道殿がお恨みになるのはごもつともです。然し、その功績に対する官位と言ひ、俸禄と言ひ、全て満ち足りたものであることも確かです。それは、平家の功績が莫大なものであることを朝廷が御認めになつたからです。法皇側近の者が反逆を企て法皇が是をお許しになつた、という話は、恐らくは陰謀をたくらんだ者たちが苦し紛れに流した中傷で有ると思います。噂を信じて自分の見た事を疑うというのは良くある弊害です。取るに足らぬ人物が流す無責任な噂が朝廷の恩を深く受けた家臣を反逆に導く例は、此の世の人間関係に少なくありません。天帝の御心は青空のように廣いものと言われております。後白河法皇のお心も、きつとそうであると私は信じております。（実際には希代の策士であるが）家臣が天子に逆らうことは人臣の道に背くことになります。此処は冷静にお考え頂いて御判断を頂きますようお願いを申しあげます。勿論、私がお聞きした入道殿のお気持ちは法皇にも申し上げるつもりです」

静憲法印は、その様に言つて平家屋敷を出た。付近にいた者たちは、怒りまくつていた清盛入道に恐れることなく説教じみた立派な返事をした静憲法印を「度胸の据わつた凄い人だ!」と褒め称えたのである。此の章段はこれで終わるのだが、次の「大臣流罪」以下は怒りの収まらない清盛入道が、静憲法印に言われても「予定は大事」と関白以下を流罪にするのである。なぜ、其の様な暴挙に出たのか？清盛の苦情の中に中納言人事があり関白家と平家との間に起こつたトラブルが清盛の怒りに関連しているので先に説明をして置く。

巻第一に「殿下乗合」があつた。清盛の孫・資盛

らの若者の騎馬と、摂政・藤原基房の行列が通行のトラブルを起こしたのだが、実は基房の兄である基実が摂政関白家を継いで清盛の娘・盛子を妻としていた。ところが基実が若くして死亡し嫡子・基道が幼少であったため、膨大な遺産は盛子が相続しただけでも盛子も若死にし、多分、後白河法皇の差し金で平家に行くべき遺領は没収され関白職は基房に渡ったのである。つまり、平家にすれば平家の系列にあった摂政関白職と膨大な領地が後白河法皇と藤原基房に横取りされたようなものであるから、二重三重の恨みがある。

なお、この盛子と言う女性は琵琶の名手として知られ、また高倉天皇の即位に際しては「御母代（はしろ）公式な母親代わり」として、准三后（皇后、皇太后、太皇太后に準ずる地位）を与えられ「白河殿」という敬称を与えられたという。優れた女性だったのであろう。

静憲法印は平清盛と対等に交渉して引き揚げてきたのだが、清盛にすれば此処で弱気になったのでは後白河法皇に屈することになるから、静憲に言われたことなどは、さつさと忘れてしまった。自分が考えていたとおりに「実力行使」に踏み切ることにしたから静憲法印が怖さを堪えて熱弁を振るったことは全くの無駄になったのである。

此の俣では静憲法印が気の毒なので、平家物語には無いが、源平盛衰記にある話をサーブスに書いておく。熊野に金剛兄弟といって二人とも五十人力の若者がいた。池を掘っていた際に大石が出てきて始末に困っていたのを、兄弟が訳も無く取り除いてしまった。是を聞いた静憲法印が主人に乞い受けて二人を家臣にした。兄弟は大力の上に弓の名手であったから、常に静憲の身を守り隙が無かった。場合に

依つては清盛に狙われて暗殺されかねない静憲法印は、こうして無事に過ごすことが出来たのであろう。

次の稿は「大臣流罪」つまり、清盛の逆襲であり当時の政府高官が平清盛の一存で揃って首になるという、考えように依つては国家の危機にも相当する大事件なのである。当時の清盛は後に安徳天皇となる言仁親王の祖父ではあるが、只の隠居爺さんに過ぎなかったのに関白以下の主要公卿を辞めさせる権限を行使した。尤も手続き上は清盛が天皇に奏請し、天皇の名で行われたらしいから「天皇が悪い！」と言えないことも無い。高倉天皇は清盛夫人・時子の甥であり、かつ清盛の娘・徳子が中宮に上がっていたから、恐いジイサンと言うことを聞かない訳にはいかなかったのであらうけれども、当時の日本は個人の感情で政治が左右される実に素晴らしい国家であった。

大臣流罪（だいじんざい）のこと

近代では総理大臣を始め政府高官や国会議員など国民の範たるべき人物が汚職事件などで刑務所に体験入所をする例もあるから「大臣流罪」という表題も珍しくは無いが、平安時代には有り得ない出来事であつたらしい。それも平清盛の一存で行われたから「前代未聞」と言われた。平家が全盛を極めた、と言うより横暴も頂点に達した、と言うべきことであらう。しかし猿でも樹木のテッペンに登れば、後は落ちるだけであるから此の章段は平家の没落を暗示している。

前章段で平清盛入道と互角に渡り合つた静憲法印は、後白河法皇の御所に戻って交渉の次第を報告し

た。法皇にも少しうしろめたいところがあるから、何も言わずに静憲さんの話を聞いているほかは無かつたのである。

ところが、あれだけ文句を並べた清盛であるが、其れだけでは収まらず、静憲法印が来た翌日の十六日には、自分が前から思いついていたことを実行に移した。関白の藤原基房から太政大臣・藤原師長以下、いわゆる後白河上皇派と目される上級官僚四十二名を勝手に免職し追放処分にした。

関白は九州・太宰府の次官に大左遷のうえ身柄は九州の何処かに流されることになった。九州まで行かされるのは辛いので、船に乗せられる鳥羽の近くの古河（現在は古川）という所で出家した。原本には鏡のように澄んだ心で……と書いてあるが遠方に流される者が出家すれば刑地が近く成る決まりらしいので、それを利用したのであろう。結局、日向の国（宮崎）が備前の国（岡山）になり国府近くの湯迫（ゆばさま）に置かれた。

現職の大臣が流罪にされた例は、先ず「壬申の乱」で当時の左大臣・蘇我赤兄（そがのあかえ）が負け組の大友皇子に味方して流罪にされ、次に右大臣の藤原豊成が橘奈良麿の変（孝謙女帝時代に起きた天皇廃立陰謀事件）に連座して流罪、更に左大臣・藤原魚名が氷上川継の乱（天武天皇の曾孫で聖武天皇の孫になる川継の謀叛）に関わり流罪となった。そして右大臣の菅原道真公ことと畏れ多くも北野天神様の例があり、醍醐天皇皇子である左大臣・源高明は安和の変（藤原氏の謀略）で太宰府に左遷された。さらに紫式部時代の内大臣・藤原伊周（一条帝皇后の兄）女性問題の誤解から花山法皇に矢を射たまで既に六人の大臣が流罪とされているが、摂政関白が流罪の刑を科せられた例はないのである。

一方で「中殿」と呼ばれた藤原基実の子・二位中

将（近衛中将は従四位の職であるが、大臣格の二位に昇っても中将の職にある者は清盛の婿であるため、お手盛り人事で大臣・関白になった。

安和の変があつた円融天皇時代の天禄三年（九七二）十一月一日に太政大臣であつた一条摂政謙徳公（藤原伊尹Ⅱふじわらのこれだ）が亡くなられて、其の時に弟の堀河関白・忠義公こと藤原兼道が未だ従二位中納言であつた。ところが兼道の弟は法興院の大入道（兼家）と呼ばれて大納言の右大将になつていたから兼道は弟に先を越されていた訳である。しかし兼道は兄の死に依り内大臣正二位に上がり「内覧宣旨（ないらんせんじ）」を賜つたので、弟を越えたばかりで無く多くの人を驚かせた昇進と言われた。

内覧宣旨は天皇に書類を見せる前にチェックする職務で国家行政の鍵を握る立場になる。藤原兼道の出世は人々を驚かせたが、今回の平家人事はそれを上回るものであり、さらに（平家人事で）参議にならない二位の中将から中納言・大納言を経験せずに大臣関白になった普賢寺殿こと藤原基通の出世には政務に関わる公卿、上・中級公務員などが呆れ返つていくようであつた。

再び話を被害者に戻して太政大臣であつた藤原師長は官職を罷免され東国に流罪となつた。此の人は保元の乱で負けた父親・藤原頼長の関係で兄弟四人が流されたのだが、兄（右大将・兼長）と弟一人（左中将・隆長、範長禪師）は配所で死亡し、土佐に流された師長だけが鯉を食べて生き延びたようで九年後に赦された。二条天皇時代の長寛二年八月に召し返され、やがて中納言から大納言に登用された。大納言になつた際に定数の五人を越えたので員外大納言になり、やがて大納言の定数は六人になつたらしい。そう言う特例は後山階大臣・藤原三守（仁明天皇時代の

右大臣）と後冷泉天皇時代に宇治大納言と呼ばれていた源隆国の他には聞かない。

藤原師長は管弦の道に達し、才芸に優れていたから次第に昇進して太政大臣を極められた。そういうお方が、如何なる罪の報いで重ねて流罪に遭うのであろうか：保元の昔は南海の土佐に移され今回は関所の外である尾張国だという。もとより罪無くして配所の月をみるとは風雅を愛する人の望むところであるが師長は風雅を解する人物なので今回の流罪も其れ程に悲しんではいなかった。平家物語に逆らう訳ではないが歌舞音曲に優れていただけで大臣に任命されたことが、任命した者を含めて国民に対して罪があると思うのだが……

昔、唐の国で皇太子の補導役を務めていた詩人の白楽天が左遷された際には潯陽江（しんようのえ）揚子江南岸の畔（ほとり）に安らいでいたであろうと中国の故事を思い出し、自分は名古屋近辺の鳴海潟の潮路を遠くに望んで、澄み渡つた名月を仰ぎ、濱風に詩歌を吟じ琵琶を奏し、和歌を詠んで、流罪になつたことを苦にせず、ゆつくりした気分で月日を送つていた。

或る時に尾張国の三の宮（国司が着任時に巡拝する三番目の神社）である熱田神宮に参詣して神前に琵琶を奏し詩を朗詠したのだが、地元民は琵琶でも三味線でもノンビリと演奏している余裕は無いから本当に音楽を理解する者は居なかつた。原本に「所もとより無智の境なれば、情を知れる者なし」と書いてあるが、目一杯働かされている庶民は、能無し公家のように遊び事をしている暇は無いのである。多分、当日も土地の人々は大臣が下手な独演会を開く、と言うので強制的に集められたのではあるまいか。

土地の古老、農村漁村のおかみさん、漁師、農夫

たちが仕方なく首をうなだれ、耳をそばだてていたけれども、彼らは音の強弱も旋律も知らないから早く終われば良いと思つていた。ところが古代中国春秋戦国時代、楚國の琴の名手と言われた夔巴（こは）が演奏をしたところ池の魚が踊り、周の属国であつた魯（ろ）國の名歌手・虞公が歌うと梁（はり）に積もつた塵（ちり）が動いた、と言われるように、物事の手なときには人間の感情を刺激するので、藤原師長の唄入り琵琶演奏を聴いた（聴かされた）者たちも緊張して思わず身体が強張るような思いをした。

本人は気を良くして夜更けまで演奏を続け「風香調（ふうちよう）」で演奏すれば花の香りがするような曲になり、流泉の曲にすれば月が清い光で照らしてくれた。師長は「願わくば今生世俗文字業、狂言綺語の誤をもつて……」という言葉の罪を謝り、仏教を称賛する言葉を朗詠し、普段は余り弾かない曲を弾じた。是に対して神明が感應して宝殿が大いに揺れた。（地震でも起きたのか？）師長は「平家の悪業で此の地に来なければ、此の瑞相（目出度い奇跡）を拝むことが出来なかつた」と感激の涙を流したのである。

その他の処分者としては、宇多源氏の按察（あせち）

大納言資方の子・右近衛少将兼讃岐守資賢が官職停止、参議皇太后宮権大夫兼右兵衛督藤原光能、大藏卿右京大夫兼伊予守高階康経、藏人左少弁兼中宮権大進平基親も同じく官職停止、そして大納言資方と子の少将資時、孫の少将雅賢は都から追い出された。いずれも後白河法皇の近臣たちである。流罪を担当する主幹役人の藤原実国と学者で検非違使を兼ねる中原範貞が追い出しを担当させられた。大納言の資方は「三千世界が廣いと言つても（平家の時代では）五尺の身の置き所が無い。一生は、それ程長く無い、というが（今の私には）一日が暮らし難い」と夜中に都

を脱出した。兵庫県の山岳部に潜んでいたが遂には見つかって信濃国へ流されたらしい。

権力争いであるから仕方が無いとも思われるが二年後に世を去る平清盛は全力を挙げて後白河法皇に対抗し出した。先ず法皇の周りを掃除して遂には法皇のことも不用決定する。是までに神仏の功德をしつこく書いていた平家物語は「食うか食われるか」の世界に入った。清盛が公務員大量免職の快挙？を行ったのは治承三年（一一七九）、そして翌年には源頼朝の伊豆拳兵があるのだが法皇も頑張るので「合戦」まではもう少し御猶予を！

（続く）

※打田昇三兄の私本・平家物語が先日渥頂巻が完成しこれで全巻の打田私訳が完成しました。これを記念して11月3～8日の日程で、石岡市・街角情報センターでふるさと風の会の作品展を開くこととなりました。下記に詳細を紹介いたします。

《ふるさとの》

アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-470-0000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会作品展

11月3日～8日：石岡市・街角情報センター

ふるさと風の会は、2006年6月「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を基軸として、仲間達が集まり、毎月会報「ふるさと風」を発行してきました。今月号で通刊113号となりました。

ふるさと風の会では、会報に発表したものの中から、作品化出来るものを小冊子にまとめて文庫化しています。今回は、打田昇三氏がふるさと石岡にとって因縁深い平家物語を「私本・平家物語」として全訳を完成させたことを記念して、ふるさと風の会文庫展および兼平智恵子の風の言葉絵展を開催いたします。

主な出展文庫

- | | |
|---------------|-------------------------|
| ○打田昇三の私本・平家物語 | ○兼平智恵子の石岡散歩 |
| ○打田昇三全集全6巻 | ○伊東弓子 一行詩「風の景」 |
| ○虚構と真実の谷間（上下） | ○菅原茂美「遙かなる旅路」 |
| ○朗読舞詩集「寒蝉」 | ○ふるさと物語「霞ヶ浦の紅い鯨」 |
| ○皇帝ペンギンの首飾り | ○ふるさとの七十二侯に一行の呟いて七十二相…他 |

作品展のお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座では、茨城県出身の二十五絃箏奏者:中川果林さんを応援し、ギター文化館での演奏会を共催いたします。多くの方々に中川果林さんの奏でる静と動の世界をお楽しみいただきたいと思います。

二十五絃箏
KARIN 2015 **11/29**
sunday
中川果林 15:00 start
ギター文化館

西洋でも東洋でも日本でもない
“日本に生まれ育った25絃箏と私と声”



プログラム

みち
うつろい
赤い花 白い花
Storm in the darkness
こきりこ節

他

2015年11月29日(日)午後3時開演 | 午後2時30分開場

料金 一般 ¥3000 学生 ¥2000 チケット取り扱い ギター文化館

お問い合わせ&お申し込み できることをできるだけプロジェクト しおみえりこ

090-2564-3198 2carnival@gmail.com

主催: できることをできるだけプロジェクト 共催: ことば座 協力: ギター文化館 | NPO法人自然生クラブ | 宙の会